総社市埋蔵文化財発掘調査報告　4

# 法　蓮　40　号　墳

1987年3月

総社市教育委員会

# 序

古代と21世紀をむすぶ風格ある文化都市づくりをめざす本市には，古代吉備の中枢地として数多くの埋蔵文化財の存在が知られています。このため，埋蔵文化財の保護保存については，特に慎重に対処しているところであります。しかし，近年は県南内陸工業地域として，また岡山，倉敷のベッドタウンとして，民間企業による開発は著しいものがあります。

今回の発掘調査は，民間企業による工場団地の造成時に新たに発見された古墳に関わるものであります。調査の結果，六世紀前半の古墳と判明し，さきに報告しました法蓮37・23・22・38号墳と共に，群集小墳の研究にとって貴重な資料を得ることができました。

この調査報告が，今後の文化財の保護保存に活用されるとともに，わずかでも考古学の研究資料として役立てば幸いであります。

調査事業に際しましては，事業者である東総社金属協同組合をはじめ，関係各位から多大の御指導と御協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和62年３月

総社市教育委員会
教育長　浅沼　力

# 例　　言

1．この報告書は，工場団地造成に伴い，東総社金属工業協同組合からの委託をうけて，総社市教育委員会が実施した「法蓮40号墳」の発掘調査の報告である。

2．発掘調査は村上幸雄が担当し，文化係職員谷山雅彦，高田明人の助力を得て，昭和61年3月7日から3月18日まで実施した。

3．出土遺物の整理は，社会教育課服部収蔵庫にて行い，報告書作成後は同所に保管している。

4．本報告書の執筆，編集は村上幸雄が行った。遺物整理にあたって村上敏子の協力を得た。

5．この報告書の高度値は海抜高であり，方位は磁北である。

6．第1図の地形図は，国土地理院発行の50,000分の1の地図（岡山北部）を，その他の地形図は総社市発行のものを複製したものである。

7．この報告書に関係する実測図，写真，遺物等は，服部収蔵庫で保管している。

# 目　　次

序　　文

例　　言

第１章　調査の経緯 …… 1

第１節　調査にいたる経過 …… 1

第２節　調査の体制 …… 2

第２章　地理的歴史的環境 …… 2

第３章　調査の経過 …… 4

第４章　発掘調査の概要 …… 5

第１節　位置と環境 …… 5

第２節　墳丘と周溝 …… 8

第３節　埋葬主体 …… 10

第４節　まとめにかえて …… 16

## 図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 1

第２図　三須丘陵周辺図（S＝1／50,000） …… 3

第３図　法蓮古墳群周辺古墳分布図（S＝1／8,000） …… 6

第４図　調査前（上）と調査後（下）の墳丘図（S＝1／200） …… 7

第５図　墳丘断面図（S＝1／80） …… 8

第６図　墳丘出土の遺物 …… 9

第７図　主体部及び遺物出土状態（S＝1／30） …… 11

第８図　出土遺物１ …… 12

第９図　出土遺物２ …… 13

第10図　出土遺物３ …… 14

第11図　出土遺物4 ……15
第12図　出土遺物5 ……16

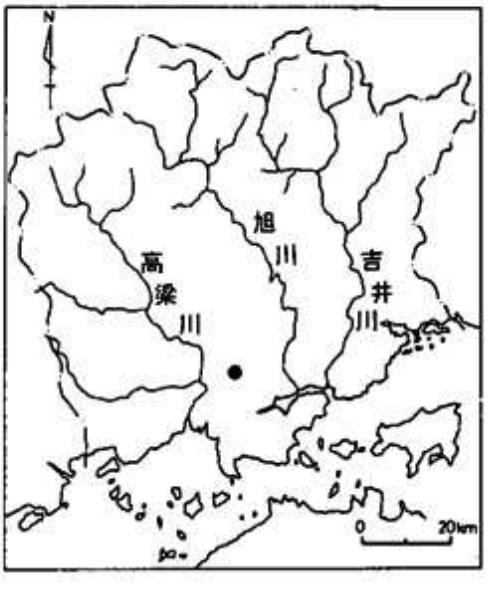
## 図 版 目 次

図版1　1．調査前の状態（北から）　2．調査開始時の状態（北から）……19
図版2　1．調査中の状態（西から）　2．箱式石棺の残存状態……20
図版3　1．箱式石棺検出状態（西から）　2．周溝と墳丘（南から）……21
図版4　1．東トレンチ土層断面　2．須恵器出土状態……22
図版5　1．掘り上がり後の遠景（北から）　2．掘り上がり後の近景……23
図版6　1．遺物出土状態（東から）　2．鉄刀出土状態……24
図版7　鉄鏃と鉄刀出土状態（北から）……25
図版8　1．遺物出土状態全景　2．短甲……26
図版9　1．鉄鏃（A群）　2．鉄鏃（B群）……27
図版10　1．胡禄ほか　2．円筒埴輪と須恵器……28

# 第１章　調査の経緯

## 第１節　調査にいたる経過

東総社金属工業協同組合の新工場に伴う，法蓮23・37・22・38号墳の発掘調査にいたる経過については，さきに「法蓮古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』２（註１）として報告したとおりである。しかしこれら４基の古墳の調査は、立木伐開前のものであり，分布調査を実施しているとはいえ，低平な墳丘をもつ前期群集墳の多い造成地内にあっては，同じような古墳が存在する可能性は充分考えられることであった。このため発掘調査終了後に，事業者に対し伐開後の現地立入りの申し入れをし，連絡を密にするよう約していた。ところが伐開後の昭年61年３月になって造成地内を踏査していたところ，23・37・22・38号墳など前記調査４墳が所在する尾根の北斜面稜線上において，工事用道路とそれに伴う一部の表土除去地に箱式石棺らしい石材と短甲と考えられる鉄片が散乱しているのが確認された。すでに一部で工事用道路などの造成工事が開始されていたため，直ちに事業者に連絡し，当該地の工事の中止及び協議の申入れを行った。しかし新たに発見された古墳（法蓮40号墳）の所在する尾根は切土部分にあたり，計画変更が不可能であるため，事業者の経費負担により記録保存のための発掘調査を行うこととなった。




第１図　遺跡の位置

## 第２節　調査の体制

発掘調査は，さきに述べたごとく東総社金属工業協同組合による経費の全額負担により，総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施することとなった。

なお調査にあたっては，東総社金属工業協同組合には経費の負担をはじめとして各種の便宜をはかっていただいた。また発掘作業については，下記の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表します。

**調査組織**

**社会教育課（文化係）**

課　　長　　樋口文男

課長補佐　　村上幸雄（調査担当）

主　　事　　小田　求（庶務担当）

主　　事　　谷山雅彦（調査担当）

主　　事　　高田明人（調査担当）

作 業 員　　寺松　毅，大槻寿騎太，平田　実，秋田英司，狩屋好晴，永田秀一

なお発掘調査にあたって，下記の方々から温かい御指導と御教示を得たことを記し，厚くお礼申し上げます。

亀田修一，葛原克人，河本　清，小田富士雄，武末純一，新納　泉

# 第２章　地理的歴史的環境

中国山地に発した高梁川は，吉備高原を縫って南流し瀬戸内にそそぐ県下三大河川の一つである。下流近くの市内湛井あたりで分出した旧河道は，網の目のごとく流走し各所にいくつもの微高地を形成している。総社平野の基盤をなすこれら微高地群は，縄文時代晩期からそれ以降の時代において先人に格好の活動の場を提供した。平野の北縁は吉備高原の南縁となり，南は 200ｍ級の主峰列にとりかこまれ，その東西を高梁川と足守川に画されたこの一帯は，自然条件にも恵まれた肥沃な土地で，居住地としては最適の場であり，吉備の中枢地として以後歴史の主舞台に大きな役割を果している。

三須丘陵は，平野南縁の主峰列から北東へのびる半独立状の標高50～60ｍの低丘陵群で構成され，その規模は 3.5×１㎞ほどである。この丘陵には，これまでのところおよそ 350基の古

墳の所在が確認されている（註２）。丘陵東辺の全長 350ｍの巨墳である造山古墳，西辺の全長 286ｍの作山古墳をはじめ，南辺の全長 120ｍの寺山古墳，丘陵内にある全長 142ｍの小造山古墳などの巨大墳ばかりでなく，大小さまざまの規模をもつ前期古墳がみられる。後期にいたっても備中こうもり塚（註３）や江崎古墳（註４），緑山古墳群（註５）をはじめとする巨石墳の存在は他の地域を圧する様相をみせる。古墳時代の全期間を通じてこの三須丘陵が一大造墓地であり，周辺の平野内の微高地上に集落が形成されていたことは想像に難くない。また以後の時代にあっても，平野北縁に所在する古代山城鬼ノ城（註６）や，平野のど真中に推定されている備中国府跡，丘陵南縁の国分二寺の存在など，かつてこの平野を拠点とし活動した人々の足跡が大きく残されている。とくに巨大墳が築造された五世紀以降の状況は，吉備勢力の拠点として畿内政権との抗争と解体にいたる過程に如実に示されているといえよう（註７）。

さて視点を法蓮古墳群の周辺に向けてみよう。法蓮地区は三須丘陵の中央からやや東寄りにあるが，尾根一つを越えればさきにみた全国第四位の巨墳造山古墳とその陪塚榊山・千足古墳を望む岡山市加茂の地域である。この三須丘陵の東端部に近い稜線上とその周辺には，北から全長40ｍの方墳折敷山古墳（註８），小造山古墳（註９），全長50ｍの帆立貝形の夫婦塚古墳（註10），同形墳で全長50ｍの銭瓶塚古墳（註11）が並ぶ。法蓮古墳群のうち，前回調査を実施した４墳の立地する小尾根周辺には，西南西 200ｍに獣帯盤竜鏡を出土したとされる大ぐろ古墳＜法蓮10号墳＞（註12）を除いては有力墳はみられず，いずれも径10ｍ前後の低平な墳丘をもつ前期古墳と推定される小墳があり，調査墳もその範疇に含まれるものである。法蓮地区から丘陵内の西方をみわたしてもほぼ同じ状況である。小造山古墳をはじめとする有力墳の時期が明確でないが，五世紀代の吉備首長権が造山古墳，作山古墳，寺山古墳へ継承されていく過程にあって，その母胎となりそれらを支えた階層の姿をこうした状況にみることができようか。

第２図　三須丘陵周辺図（Ｓ＝１/50,000）

# 第３章　調査の経過

本墳は，昭年58年の分布調査時には，雑木や下草の繁茂もあり，また墳丘の高まりも殆んど確認しえないような状態であった。このため前回の調査時には，尾根頂部の４基の古墳の調査を対象として行った。しかし立木伐開後の踏査で，本墳の東，西両側の斜面に工事用道路が付けられ，墳丘の一部の表土が除去された結果，箱式石棺材と推定される花崗岩の板石数枚が散乱しているのが確認された。このため周辺部を精査したところ，短甲と考えられる鉄片を採集することができ，北斜面の中程にあるわずかな高まりが古墳であることが判明した。しかし本墳を除いては精査したが，計画地内に新たな古墳や遺跡を確認することはできなかった。すでに重機の搬入も終り，着工を数日後に控えた状態であったため直ちに事業者に通報し，協議を行った。しかし先述したごとく，当該地が造成地内で最も広い工場区画地であり約５ｍほど切り下げる部分にあたっていて，保存をはかるためには造成計画を根本的に練り直す必要が生じ，現状保存は不可能に近い状態であると考えられた。このため止むなく，事業者に経費負担を要望し，記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

なお本墳から下降する北約30ｍの稜線上には，きわめて僅かではあるが高まりを見せており，それが地山の状態を反映しているのか，あるいは本墳のような低平な小墳の可能性をもつものなのかは不明であったため，事前に小トレンチにより調査を行った。調査は尾根上を中心に，一部の斜面を含めて行ったが，５～10ｍ前後の表土層下は花崗岩の風化土の地山であった。このため先にみた僅かな高まりは自然傾斜であることが確認されたため，今回の調査は40号墳のみに限って行うことにした。

**日誌抄**

60年２月24日　伐開後の踏査により新たな古墳の存在を確認。法蓮40号墳とする。

３月７日　本日より調査に着手。発掘用器材の搬入。墳丘及び周辺の現況測量を行う。墳域を清掃。円筒埴輪片遊離出土。箱式石棺と推定される内部主体を確認。

３月８日　墳丘東，西の工事用道路断面清掃。墳丘北側の掘削部を清掃。箱式石棺掘り下げ，箱式石棺は東西方向に長軸をもつ。須恵器杯身片，短甲片出土。

３月９日　箱式石棺及び遺物出土状態の撮影，実測。墳丘規模確認のため，南北方向にトレンチを設定し，掘り下げ。北側は掘削されているため南側のみ。

３月10日　箱式石棺実測，掘り下げ。棺内より鉄刀出土。西側小口部周辺の棺上から短甲数片出土。南北トレンチ掘り下げ。箱式石棺に近い部分に短甲か他のもの

かは不明だが鉄錆確認。

3月11日　雨

3月12日　南トレンチ土層断面実測。南東部の墳丘の表土除去。円筒埴輪数片出土す。墳丘東西方向にトレンチ設定，掘り下げ。

3月13日　箱式石棺実測。東西方向の墳丘断面撮影，実測。箱式石棺の南の側石天端レベルで鉄鏃二群検出。南西部の墳丘の表土除去。

3月14日　雨

3月15日　箱式石棺実測。墳丘及び周溝ほか掘り下げ。周溝内から須恵器杯身片，円筒埴輪片出土。

3月17日　北東部の墳丘から円筒埴輪片出土。箱式石棺の掘り方検出。墳丘東半分を掘り下げる。数片の円筒埴輪片出土。土層観察用の畦の取りはずし。箱式石棺掘り上がり後の撮影。周辺部から全景撮影。

3月18日　箱式石棺実測。鉄刀，鉄鏃，短甲など遺物取り上げ。箱式石棺の掘り方内掘り下げ。墓壙掘り上がり状態撮影。調査終了。器材搬出。

# 第4章　発掘調査の概要

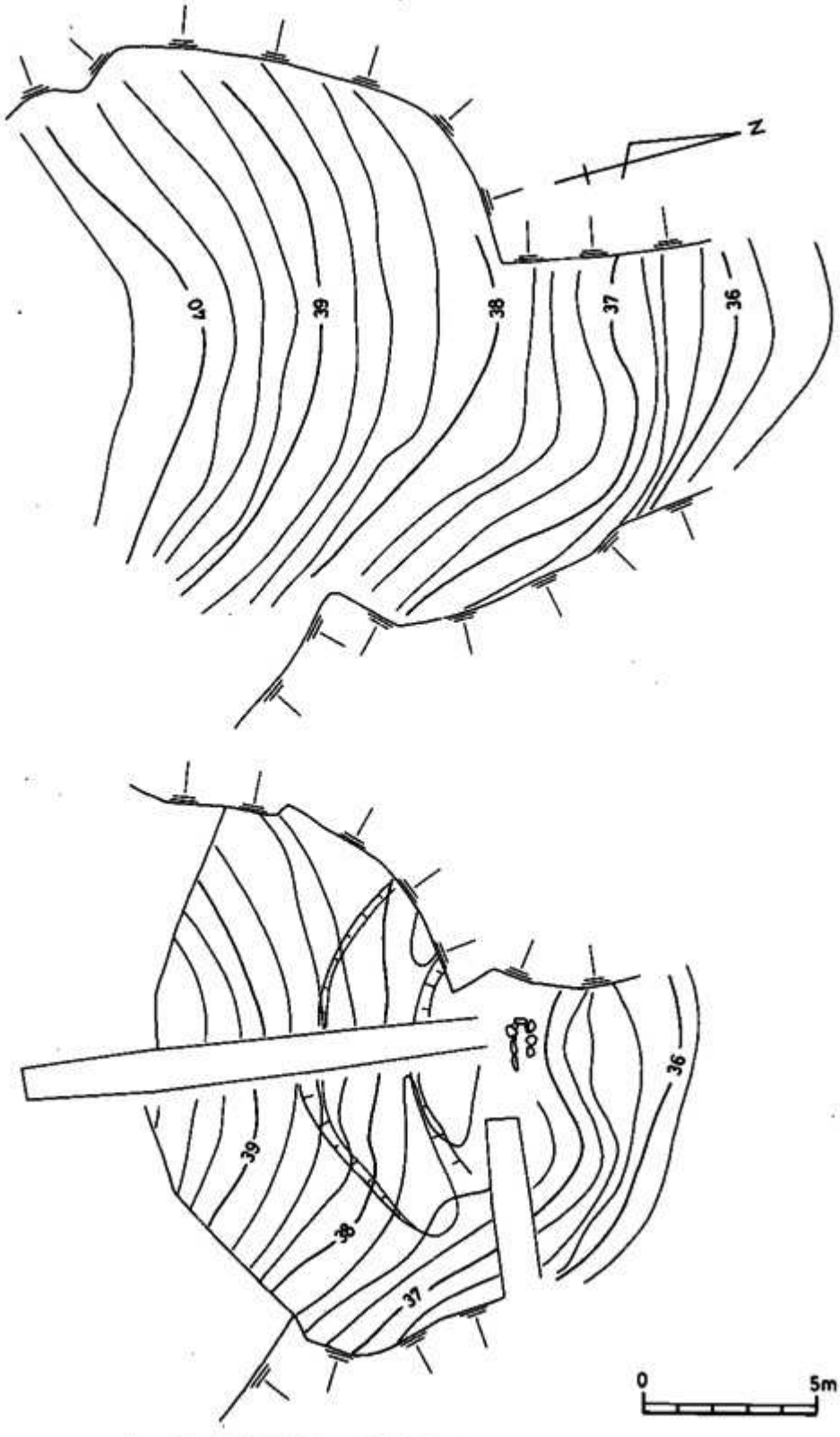
## 第1節　位置と環境

本墳は，総社市下林1027番地ほかに所在する。

三須丘陵は，北東端に標高70m級の庚申山をはじめとする高部があるほかは，30～50m級の短小な低丘陵で構成されている。丘陵群中の中央よりやや東に標高62.6mの高部があり，ここに全長約50mの前方後円墳で獣帯盤竜鏡を出土したとされる大坑古墳（法蓮10号墳）が所在する。本墳はこの高部から東に派生し，さらに北へ短かくのびる標高50m弱の小尾根に立地している。この小尾根のつけ根部から頂部にかけて，39・22・38・37・23号墳の5墳が所在し，39号墳を除く4墳が前回調査された。本墳は，ほぼ尾根頂部先端に位置する23号墳から，約70m下方の標高38m前後の稜線上に所在している。この小尾根と新池を挟んだ東の斜面裾には，前回調査時には諸々の事情から立入り確認ができなかったが，径10mほどの法蓮29号墳があり，緑地として現状保存されている。

法蓮古墳群は，かなり広い範囲の古墳を包括し呼称しているが，計画地内およびその周辺部

第３図　法蓮古墳群周辺古墳分布図（S＝１/8,000）

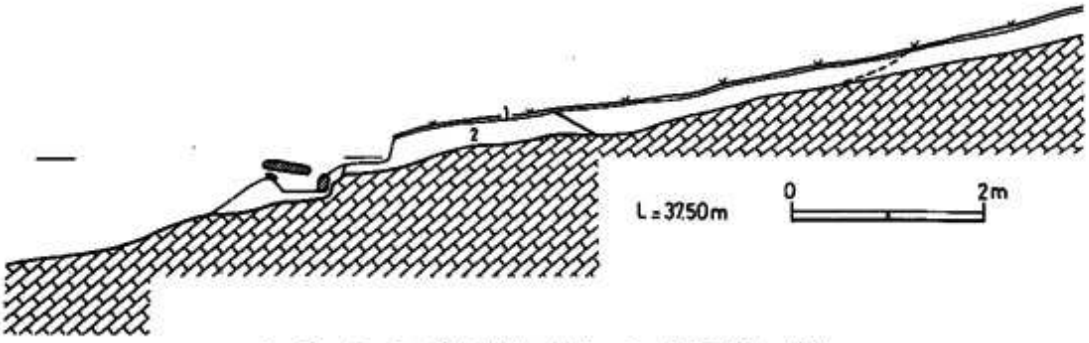



第４図　調査前(上)と調査後(下)の墳丘図(S＝1/200)

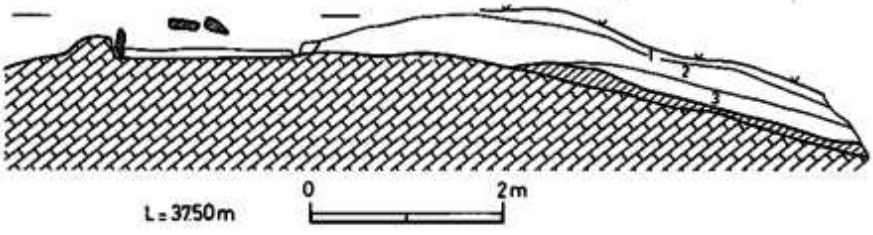
では横穴式石室墳は散見される程度であり，径10ｍ前後の低平な墳丘をもつ前期と推定される群集小墳の存在が目立つ。しかし計画地内の一角にあり消滅したとされる翁塚古墳のような巨石の横穴式石室墳もあり，さきの大坑古墳の存在とあわせ，古墳時代のある時期において三須丘陵内における一つの拠点であった可能性をうかがわせる地域である。

## 第２節　墳丘と周溝

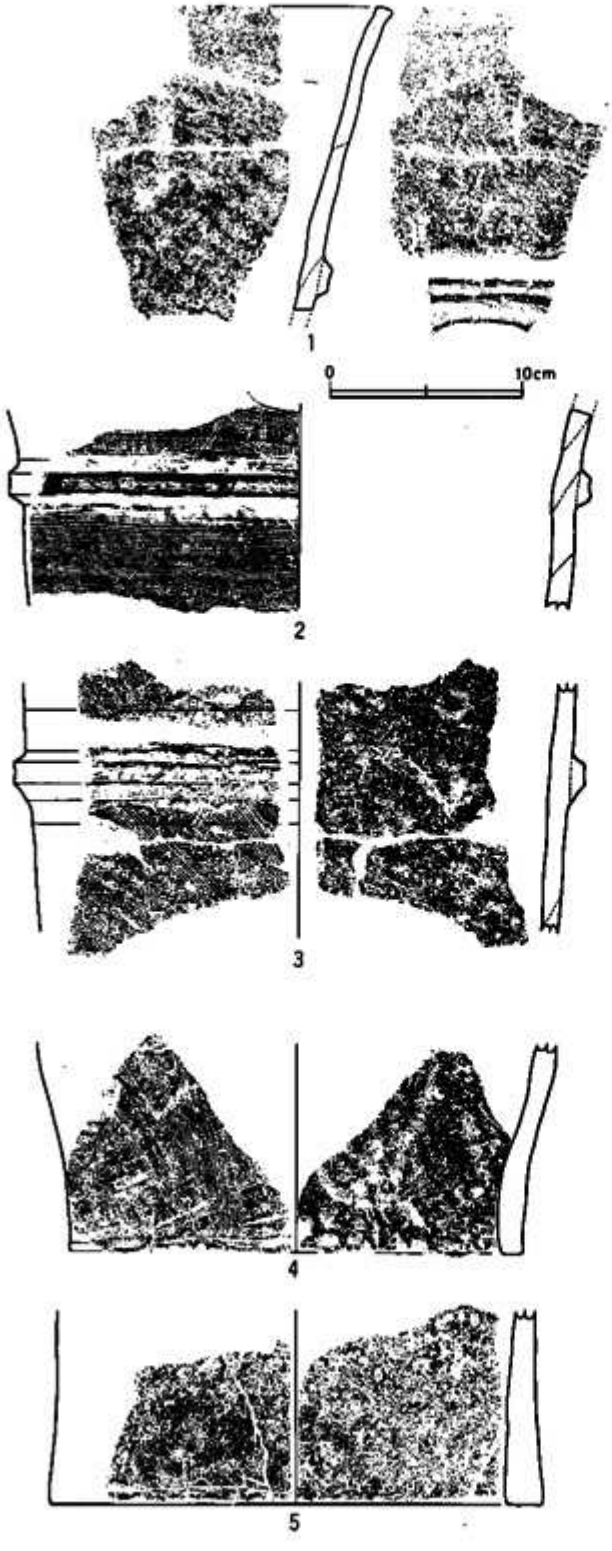
本墳は，北へ小さくのびる舌状尾根の標高37ｍ前後に所在しており，墳丘から下方はやや平坦部をなす傾斜変換点にある。墳丘の東側と西側は，調査前に工事用道でかなりの部分が掘削されており，特に墳丘西側は主体部近くまで及ぶ状態であった。また北側は大部分が削り取られていて，墳丘の殆んどを欠失していた。この部分は清掃の結果，盗掘というより小規模な土採りのため掘られたものと考えられた。このような状態であるため墳丘は全般に残存度が悪く，しかも本来低平な墳丘であったと推定されることから，石棺材や鉄片の出土がなければ古墳と考えるには躊躇せざるをえない状態であった。このため墳形規模を確認するためのトレンチも，南と東の二方向に設定するにとどまった。第５図の土層断面は，１層が表土層，２・３層は基本的には同色の褐色砂質土である。しかし粒子の細粗からみれば，２層は粗，３層は細粒となる。基盤層は花崗岩の風化土層で，粗粒の淡褐色砂質土である。これらの各層はいずれも自然層と考えられるものであり，盛土層はすでに流出し現存しないと判断された。




１．表　土　２．褐色砂質土（粗）　３．褐色砂質土（細）




第５図　墳丘断面図（Ｓ＝１／80）




第６図　墳丘出土の遺物

以上の状態から推定して，本墳の築成にあたっては，まず位置を確定し，旧表土層の除去を中心とした整地整理を行い，墓壙を掘り箱式石棺を据えたものと考えられる。盛土は，箱式石棺を覆い，墳丘の全体を整える程度の軽微なものであったと推定され，現況は盛土層が流出した状態と考えられる。

周溝は，傾斜の高い南側にのみ弧状に残る。最大幅約３ｍ，最大深さ約20cmを測り浅い皿状を呈する。南側の周溝掘り方は，肩口が崩れているため不明瞭である。

本墳は，以上の状態からみて山側に弧状の周溝をもつ，径10～11ｍ前後の低平な墳丘をもつ円墳であったと考えられる。

**出土遺物**

残存状態の比較的良い墳丘東半部からは円筒埴輪が，また周溝内からは須恵器杯身の小片及び円筒埴輪が出土した。いずれも原位置を保つものはなく，遊離出土である。円筒埴輪のうち１，２は墳丘横断トレンチの北側で混在した状態で出したが，他はいずれも単独出土である。

**円筒埴輪**

１は東西トレンチの北で出土したものである。円筒埴輪の口縁部で全体に脆弱な印象をうけ，かなり磨耗している。成形時の凹凸がかなり残

る。外面は斜めのハケ，内面は一次調整の斜めハケをナデ消している。タガはやや幅広くて低く断面が台形状を呈し，タガの直下に円孔がうがたれる。淡明褐色。

2はややいびつで，胴部は楕円状となる。外面は横ハケが残り，内面は横位のナデである。タガは断面が台形を呈す幅広く低いものである。

胎土は砂粒を少量含み,焼成は良好で淡褐色を呈す。本墳出土の埴輪では調整，胎土，焼成ともに最も良好なものである。

3は接合できないが胎土，焼成などからみて，4と同一個体のものと考えられる。外面は一次の横ハケのみで，内面は斜位のハケののちナデ調整を行っている。タガは幅広く台形状の断面をなしている。淡黄褐色を呈し，焼成は比較的良好である。

4は底径23.4cmを測る。外面は幅 1.9cmほどの斜位のハケ調整が施される。内面は指ナデである。3に比べやや暗色となっている。調整は全体に粗雑である。

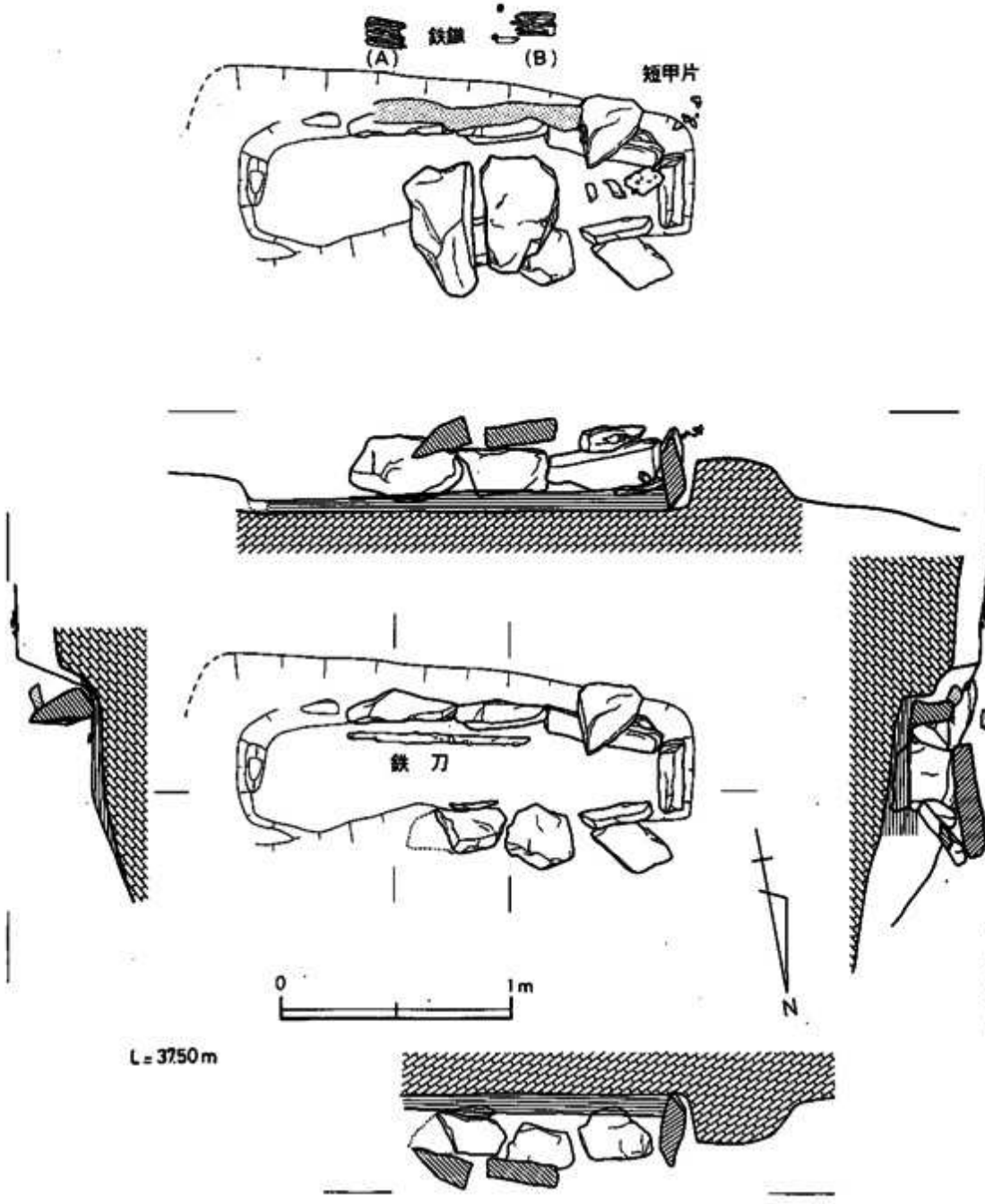
5は底径24.2cmを測る。残存片はやや直立した状態をしめしている。外面は磨耗のためはっきりしないが，3とは逆に右上りのハケ調整のようである。
内面は横または斜め方向のナデである。暗褐色。

円筒埴輪は基底部が4，5の二個体があり，1～3の口縁部から胴部もそれぞれ別個体と考えられるので，少なくても四個体は存在したものと考えられる。

なお，周溝内から須恵器の杯身片が三点出土している。いずれもたちあがりの部分1cm大ほどの細片で，箱式石棺の蓋石のレベルで出土した杯身と同じものであるが，やゝ薄く，端部はまるく仕上げている。

## 第3節　埋葬主体

内部主体は箱式石棺である。盗掘や重機による攪乱のため，残存状態は良くないが半分強の棺材が遺存している。墓壙は，長軸が尾根に直交して掘り込まれたものだが,東側と北側の掘り方肩口を欠失している。短軸の一方，東側をやや広く，他方をやや狭く掘り込んだものである。推定長2.25m，幅 0.5～ 1m，深さは40cm前後を測る。この墓壙内には花崗岩の割石を用いて箱式石棺が構築されている。側石のうち，傾斜の高い南側は三枚，北側は各石が南側のものよりやや小さい三枚が残存する。両側石間の幅は西から東へむけて僅かに幅を広げるようにすえられている。小口石は西側にのみ残っており，外側から側石を塞ぐような状態でたてられている。床面は 5～10cmほどの厚さで埋め整えられたものである。蓋石は中央部に二枚のみ残存する。北側の側石が土圧により外傾しているため，蓋石は南側石から外れた状態となっている。南側石には天端高の調整と密封のために用いられた長さ 1m弱，幅10cm位，厚さ数cmほど

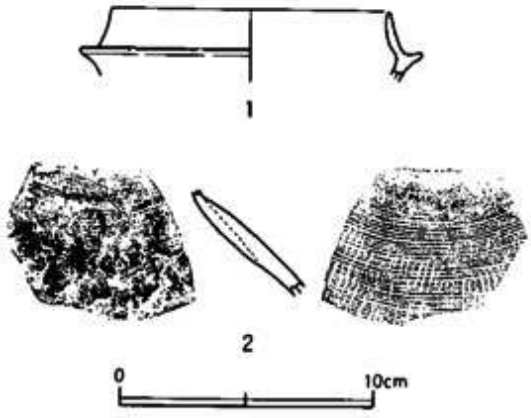



第７図　主体部及び遺物出土状態（S＝1/30）

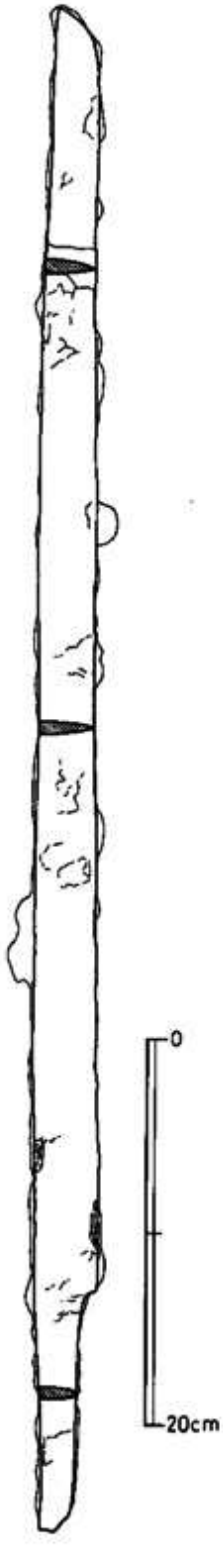
の灰白色粘土が認められる。以上みたごとく石棺の残存状態は良好といえないが，遺存する石材や石材の掘り方などからみて，内法長1.75m，幅0.25～0.4m前後，深さ0.3m位の規模でやや粗雑なつくりの箱式石棺であったと推定される。棺内には人骨や枕石はみられないが，東側の小口が西側に比べてやや広いことから，頭位を東におくものであったと想われる。

**遺物の出土状態**

棺内からは，鉄刀一口が出土した。棺内のほぼ中央部，南側石に接するようにして，切先を西に刃部を棺内部に向けた状態で検出された。他に棺内からの出土遺物はなく，人骨も遺存しない。




第８図　出土遺物１




棺外では，西側の小口石に接する南側石の天端高のあたりで須恵器の杯身が，また南側石側の墓壙掘り方の外側で，鉄鏃，胡禄，短甲が出土した。

鉄鏃はいずれも尖根式のもので，二群に分かれており，鏃身を反対方向に向け銹着した状態で検出された。東寄りのものをＡ群，他方をＢ群と呼称する。Ａ群は鏃身を東側に向けており，少なくとも16本以上であったものと考えられる。Ｂ群は，Ａ群から50cmほど西寄りで鏃身を西側に向けた状態で検出された。確認される本数は，13を数える。

胡禄は，Ｂ群の鉄鏃の茎のあたりでほぼまとまって検出された。このような状態から，本来はＢ群の鉄鏃は鏃身を，Ａ群は矢羽根を胡禄の矢筒内に収めた状態で副葬されたものと推定される。

短甲は，鉄鏃や胡禄が原位置で検出されたのに比べると，不明な点が多い。後胴部は重機により掘り出されていたが，原形に近い状態で現地表に露出していた。前胴部は，遺体埋葬時の足もと側と考えられる箱式石棺の側石と小口の接する棺の天端高のあたりで，比較的大形の破片が数片検出されたが，この部分の蓋石は現存しない。他の小片は墓壙掘り方のあたりでややまとまって出土した。これらの破片の折損面は，大半が今回の重機による破壊とは考えられないような古い折損面である。以上のような出土状態からみると，短甲が棺内に副葬されていたとするには，後胴部の発見時の状態からみて首肯しがたく，また蓋石上におかれていたとするにも蓋石の欠失する状態からみてに

わかには決めがたい。従って短甲の副葬位置については，箱式石棺の足もと側の棺外周辺と推定するにとどめておきたい。

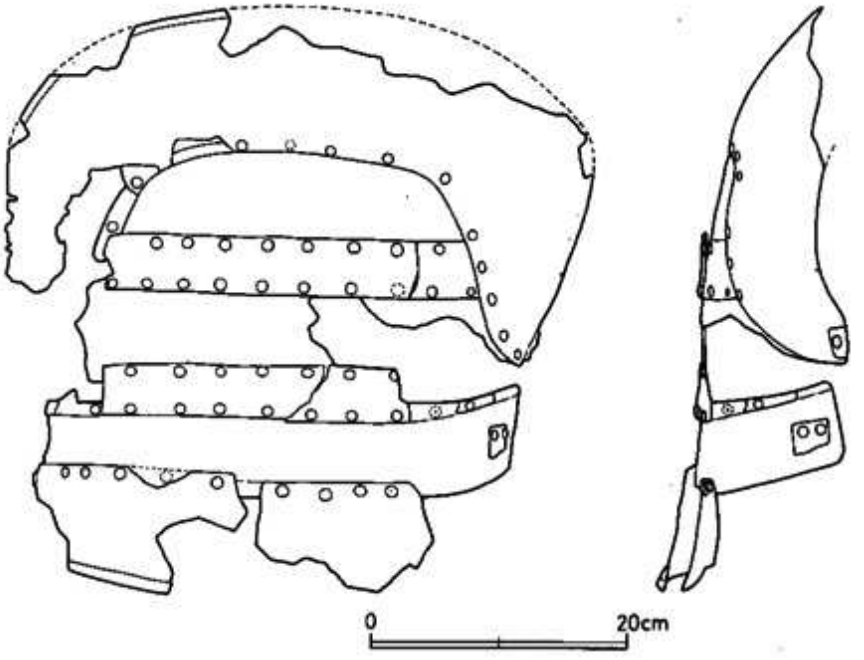
**出土遺物**

鉄刀　全長78.5cmの直刀である。刃部長66cm，幅2.9cm，峰の厚さ0.7cm。関は銹着のため明確でないが直角と考えられ，茎はわずかだが先端にむかうにつれ幅を減じている。

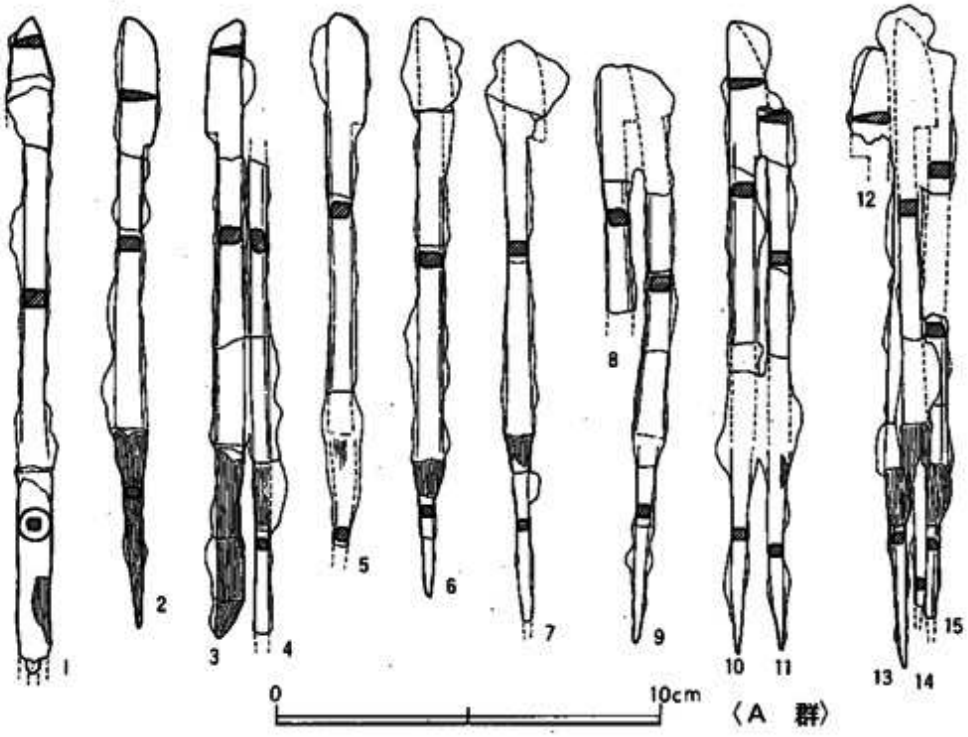
須恵器　1は杯身で約¼ほど残存する。復元口径10.8cm。たちあがりはやや内傾し，端面はまるくおさめる。受部はわずかに上方にのび，端部はまるくおさめる。受部に重ね焼きの痕跡が残る。焼成は良好で堅緻。外面はたちあがり部が灰色，体部が暗青灰色。内面は灰色で，断面は赤紫色。1～2mmの砂粒を数粒含むが良好な胎土である。2はカメの肩部片で外面は平行叩きののちカキ目を，内面はヨコナデを施す。焼成は良好堅緻で，胎土は砂粒をかなり含み中には4mm大のものもある。

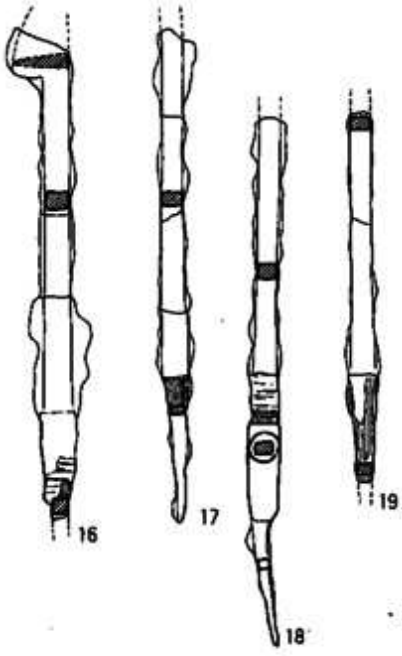
短甲　横矧板鋲留短甲である。図示した後胴部は発見時の状態に近いもので，未処理，未復元のもので多少歪曲している部分もあり，模式図的なものとなった。前胴部は小片が多く，未復元であり図示しえなかった。後胴部は竪上3段，長側4段，高さ約45cmである。右側に長方形金具が二ケ所鋲留されている。

鉄鏃　A，B群ともすべて尖根式で，小さい鏃身と長い棒状の箆被と茎をもつ。A群は，鏃身の残存するもの13本である。鏃身はすべて片関の刀子形のもので，長さ2.8～3.4cm，最大




第9図　出土遺物2

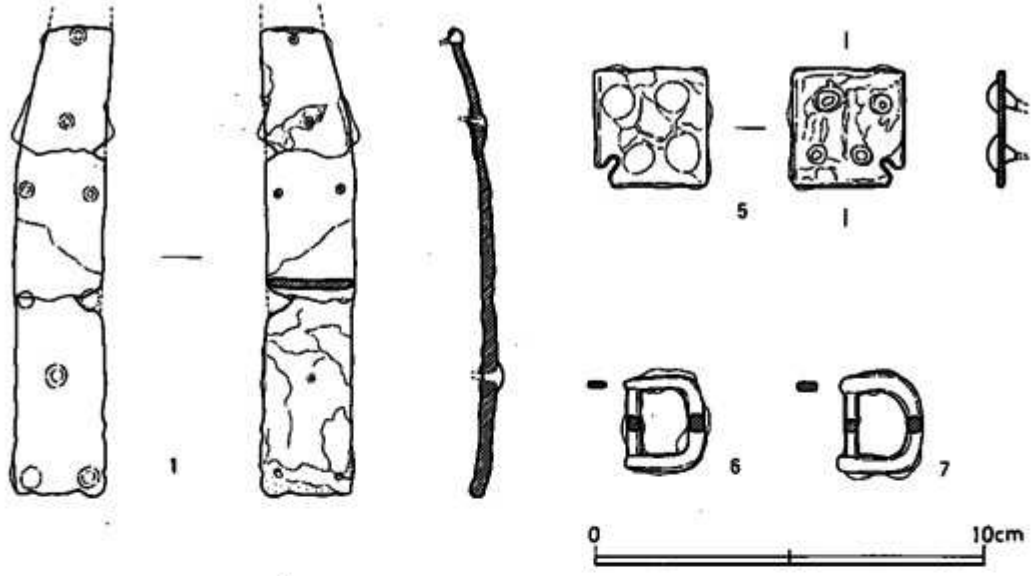


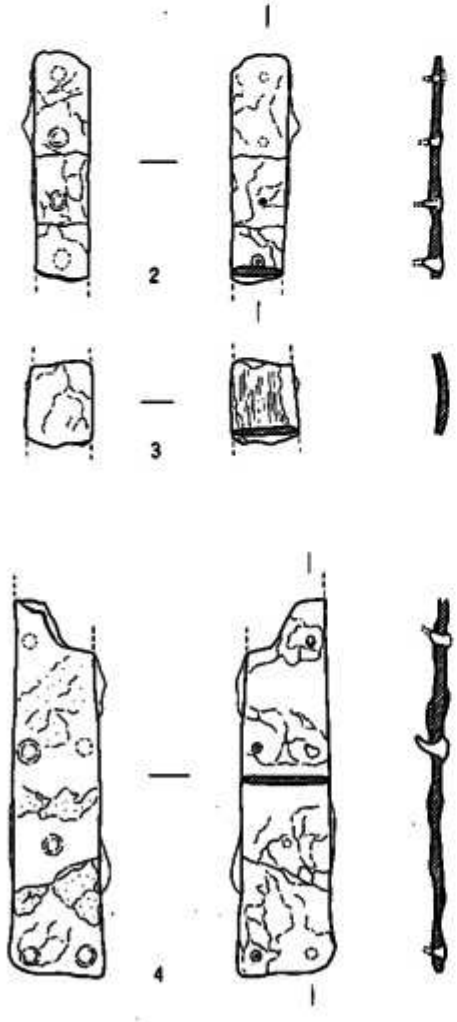

第10図　出土遺物3

幅0.9～1.0cm，厚さ約3mmである。箆被は長方形の断面を呈し，長さ7.2～8.6cm，幅0.45～0.6cm，厚さ0.3～0.45cmである。茎とのさかいは，わずかな突起がつくらしいが，木質付着のため不明確である。茎は長さ5.1～5.4cm。方形の断面から徐々に厚さを感じて尖った端部となる。矢柄の木質が残存するものが多く，1は径0.85cm，18は0.8cmを測る。B群の鏃身は一般にA群より小さく，長さ1.7～2.2cm，最大幅1.1～1.4cm，厚さ約0.3cmである。形状は銹化のためはっきりしないが，大半が両丸形のものと考えられるが，なかには6のような五角形のものもみられる。逆刺の有無は銹化のため不明である。いずれも片丸造りである。箆被は大部分は断面が長方形を呈すが，12，13のごとく方形のものもみられる。箆被と茎のさかいは，木質の付着のため明確ではない。茎は長さ5.5～5.8cmで，木質の遺存するものが多く，形状はA群のものと同工である。

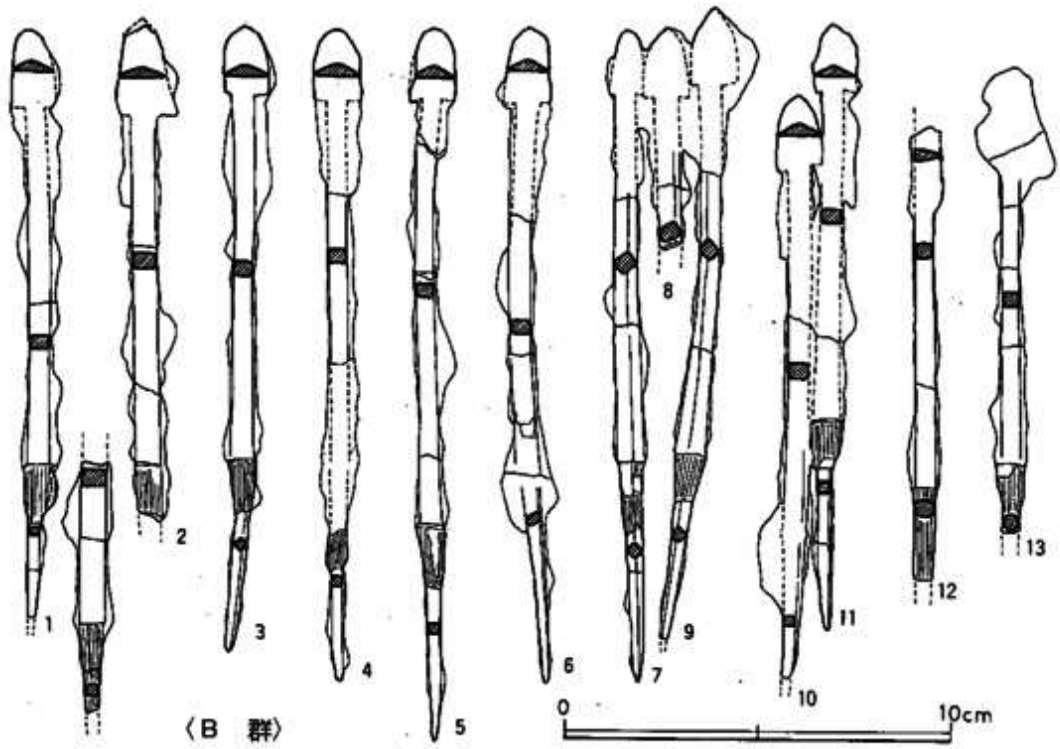
胡禄　1～7は，B群の鉄鏃と共に出土したもので，出土状態からみてもこの鉄鏃群と関連




第11図　出土遺物４




する遺物と考えられる。胡禄の出土例は少なく，具体的にどの部分に相当するのか不明である。１は現存長11.8cm，基部の幅2.3cmである。図化後他の破片が接合したので，現存長は14.5cmである。基部から先端部に向うにつれ幅を減じると共に，断面形でみるごとく緩く湾曲している。これは変形によるものではなく，もともとこうした形態のものであったと考えられる。基部のあたりは原則的には両端を鋲留しているが，幅を減ずる部分から中央部は一つで鋲留している。裏面の一部には僅かに木質が認められる。４も１と同工のものであるが，１に比べ断面形が湾曲せず直線状となっている。１と同様，裏面に木質が付着している。２，３は１や４の先端部に近い部分のものであろう。５は一辺２cmほどの方形の金具である。図中の左下角には小さな抉り込みがあり，頭の大きい鋲四個が四隅に認められる。６と７はローマ字のＤ字状を示す金具である。直線の棒状部を端部の扁平な




第12図　出土遺物５

棒状鉄を曲げて挟み込むようにして作っている。これらの金具類は，弓矢の収納具として木製状差状の板材や矢柄の固定等に用いられたものと考えられる。

## 第４節　まとめにかえて

本墳は，造成工事前の伐開によって新たに発見された小墳である。小尾根の中間部に築成された径10ｍ前後，高さ0.8ｍほどの低平な墳丘をもつ円墳である。数本の円筒埴輪をもち推定内法長1.75ｍ，幅0.25～0.4ｍの箱式石棺を内部主体とし，棺内から鉄刀１，棺外から鉄鏃二束，短甲等が出土した。こうした状況は，あたかも前期群集小墳とよく似た構成を示している。ここではこれらの出土遺物を中心に，本墳の築造期について考えてみたい。

まず指標となるのは須恵器であろう。杯身の小片が出土しており，その諸特徴から陶邑編年（註13）でいうＭＴ10よりやや古い時期が考えられよう。鉄刀は，関の部分が銹着のため明確ではないが，臼杵勲（註14）の分類でいう撫角片関一文字尻中細茎か直角片関一文字尻中細茎であり，いずれも五世紀代のものと考えられている。鉄鏃はいずれも実戦的な尖根鏃であり，前Ⅲ期以降に出現し，やがて鉄鏃の主流を占めるものである。横矧板鋲留短甲も，短甲としては新しい型式に属するものである。以上の出土遺物からみて，本墳の築成は六世紀前半頃と考

えられる。前年に実施した同一尾根の頂部に所在した4墳，法蓮37・23・38・22号墳が五世紀中葉頃から後半にかけて順次築造されたのち，しばらくの空白期を経て本墳が築造されたこととなる。すでにこの期においては三輪山6号墳（註15）にみられるごとく，総社平野近辺部でも一部で横穴式石室が採用されている時期でもある。しかし本墳は，同じ尾根に所在する前出4墳と同種の葬法をもって作られている。前期群集小墳から後期群集小墳への過渡期のものとして，本墳は位置づけられよう。

**註**

1．村上幸雄「法蓮古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』2　1985年　総社市教育委員会
2．岡山県遺跡台帳　第3分冊による。
3．葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35　岡山県教育委員会　1979年
4．全長45mの前方後円墳で，全長14mの横穴式石室には家形石棺をもつ。総社市史編纂事業の一環として，1984年10月～12月に岡山大学考古学研究室が調査。近藤義郎ほか「江崎古墳」『総社市史』考古資料編　1987年　総社市
5．石室全長10m以上，玄室幅2.5m以上の巨石の横穴式石室三基を含む古墳群。村上幸雄「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1　1984年　総社市教育委員会
6．『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会　1980年
7．西川宏『吉備の国』学生社　1975年
8．谷山雅彦「折敷山古墳」『総社市史』考古資料編　1987年　総社市
9．中田啓司，近藤義郎「小造山古墳」『総社市史』考古資料編　1987年　総社市
10．谷山雅彦「夫婦塚古墳・編笠古墳」『総社市史』考古資料編　1987年　総社市
11．高田明人「銭瓶塚古墳」『総社市史』考古資料編　1987年　総社市
12．西川宏「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」『古代学研究』90号　1971年
梅原末治「岡山県下の古墳発見の古鏡」『吉備考古』第85号　1952年
13．田辺昭三『須恵器大系』角川書店　1981年
14．臼杵　勲「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　1984年　古墳文化研究会
15．西川　宏「備中三輪山第6号墳」『古代吉備』第5集　1963年

図版 1

1．調査前の状態（北から）

2．調査開始時の状態（北から）

図版 2

1．調査中の状態（西から）

2．箱式石棺の残存状態

1．箱式石棺検出状態（西から）

2．周溝と墳丘（南から）

図版 4

1．東トレンチの土層断面

2．須恵器出土状態

法蓮23号墳

1．掘り上がり後の遠景（北から）

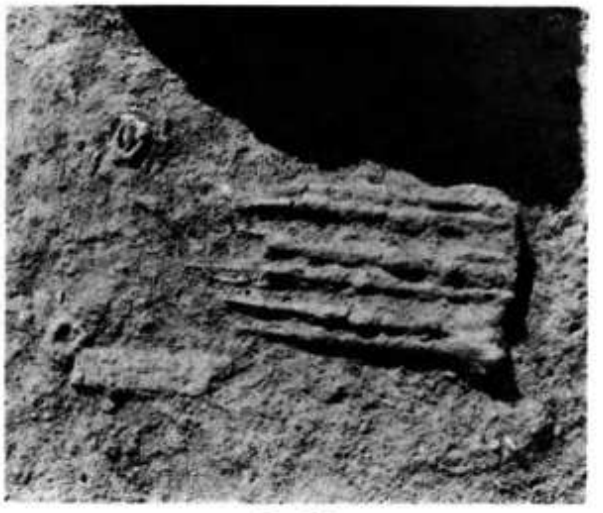
2．掘り上がり後の近景

図版 6

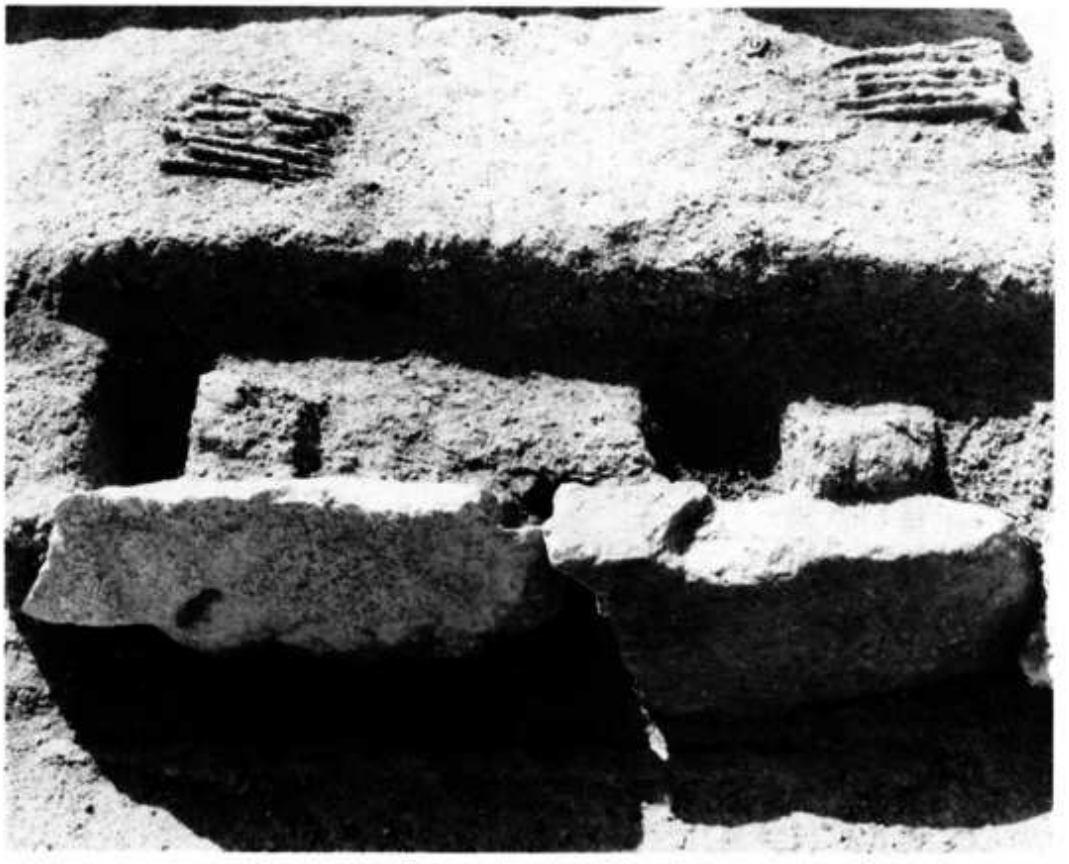
1．遺物出土状態（東から）

2．鉄刀出土状態

A　群



B　群

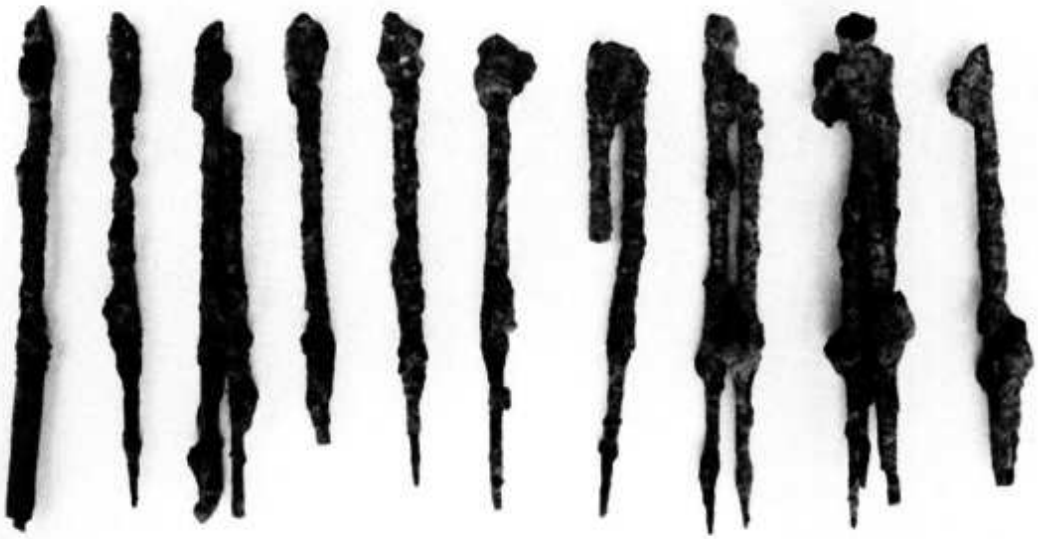


鉄鏃と鉄刀の出土状態（北から）

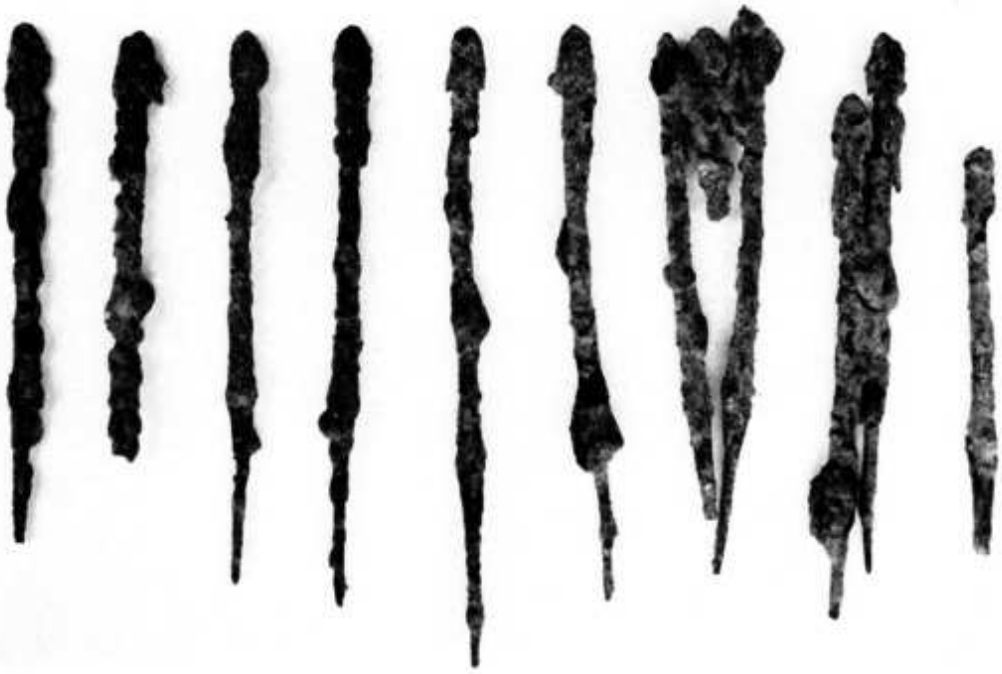
図版 8

1. 遺物出土状態全景

2. 短　甲

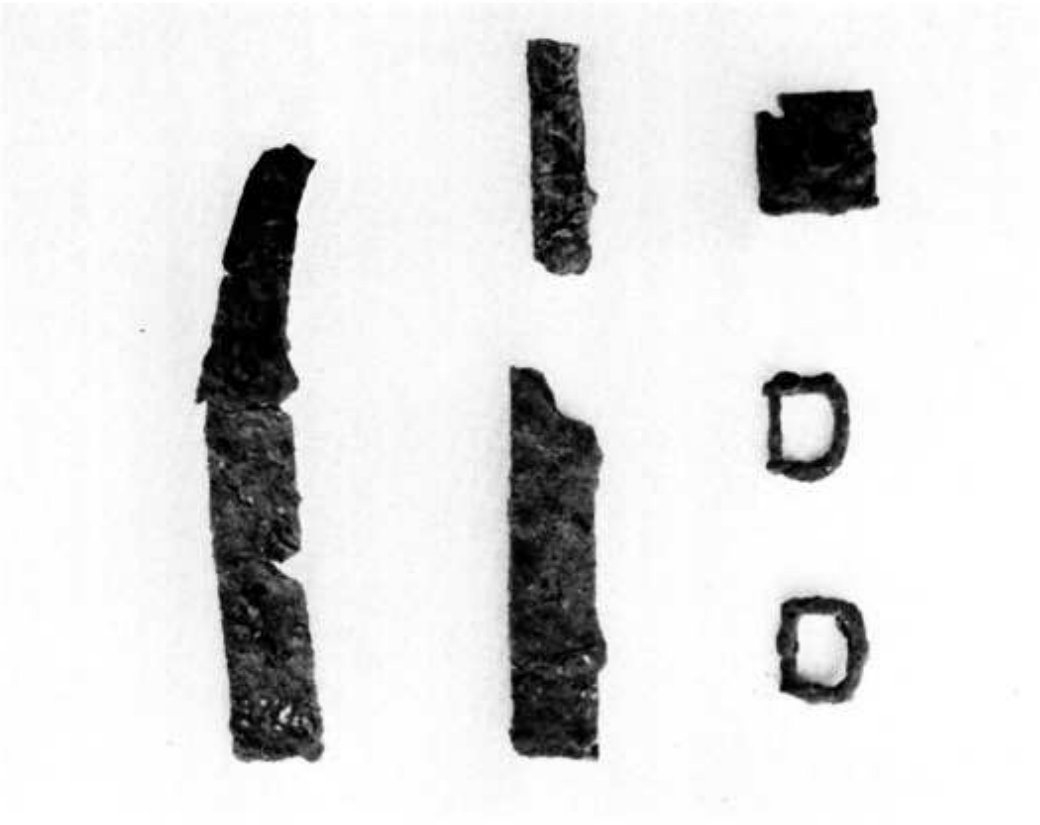


1．鉄鏃（A群）

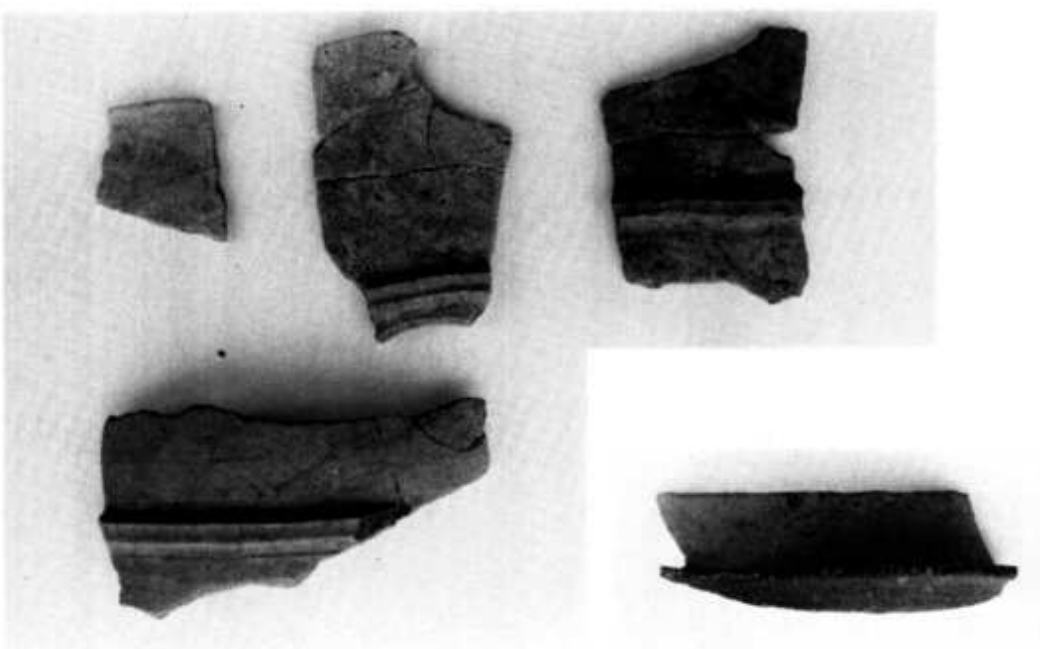


2．鉄鏃（B群）

図版10



1．胡禄ほか



2．円筒埴輪と須恵器

総社市埋蔵文化財発掘調査報告　4

法蓮40号墳

1987年3月　印刷
1987年3月　発行

編集発行　総社市教育委員会
総社市中央1丁目1番1号

印　刷　柳本印刷株式会社
総社市総社1丁目10番24号